

権力者の愛

—熊野、そしてブルーストのことなど—

権力者の愛

—熊野、そしてブルーストのことなど—

桜の季節になると、能の『熊野』のことを考える。

若いときには、桜の花など少しもいいとは思わなくて、お花見だ、ハイキングだと、まわりが騒ぐのがうるさいだけだった。その苦々しきは増す一方だが、花そのものに寄せる思いは、なぜか年毎に深くなる。うちの隣の鉄筋アパートは、「最高裁判所宿舎」という表札のせいもあって、ふだんはコソ泥も寄りつかないような無粋な建物なのだが、たったひとついいことは、広い庭のぐるりを桜の大樹

が囲んでいることである。その時節、夕暮れどきに帰宅すると、人影のたえたその庭で満開の花がひたすら咲いている。命の限りに、とでもいった風情で薄闇のなかに浮かんでいるそれを見てみると、なにかしら、愛する人をわれから振り切って別れたときのようなもの狂おしい思いがこみあげてくる。わが身を省みて思いあたることなど何もなくても、ただ気持ちだけで空を舞うような感じがする。小雨でも降っていれば、なおのことだ。

『熊野』を思うというのは、そういうわけである。

『熊野』という能は、「平家物語」のなかのほんの小さなエピソードをふくらませたものだが、その他愛なさにもかかわらず、あるいはその他愛なさのゆえに、一般には非常に好まれていて、たおやかな小面をつけた能装束の姿は、たとえば絵の題材などにもしばしば用いられる。

ストーリーはまことに単純である。平清盛の次男宗盛は、重盛亡きあと京都で天下人としての権勢を誇っていた。彼には熊野という愛妾がいる。池田の宿の長（宿場で一番の売れっ子、とでもいう意

権力者の愛

—熊野、そしてブルーストのことなど—

か)であったのを長らく京にとどめおいているのだが、故郷に残した熊野の母の病気が重くなり、死ぬ前に一目会いたいと手紙を寄越した。熊野は宗盛に暇を願い出るが、母の病気が心配だからといって、とりたてて騒ぐほどのことではない、帰るにおよばずと、許さうとはしない。それどころか、満開の桜をともに楽しもうではないかと、花見の車に同乗させるのである。心に憂いを秘めた熊野を乗せて、車は爛漫の花に彩られた洛中の名所をつぎつぎに過ぎ行き、東山で一行は酒宴をひらく。宗盛の所望で舞いをまう熊野に、村雨が降りかかった。熊野の舞い姿、盛りの花を濡らす雨、そして「馴れし東の花や散るらん」と詠む熊野の言葉にこころ動かされて、宗盛は彼女の東下りを許すのである。

能の分類としては、『熊野』は舞や歌によって幽幻な叙情性を色濃く打ち出す「三番目物」に属する。「三番目物」には、現世の人物(前ジテ)に過去の亡霊(後ジテ)が乗り移って思いを述べる「複式夢幻能」のかたちをとるものが多いのだが、『熊野』は現身の女性を主人公とする「現在能」。

表面的に見るかぎり、能としては珍しく鬱屈するものがない。母

の病を気づかう熊野の心が、哀れといえど哀れだけでも、しかしそれも宗盛の心につれ、熊野は許されて故郷へ帰るのである。余韻として残るのはひたすらに、花の盛りと見まどう美女を惜しみつつ送る思いだ。古くから「春のあけぼのの如し」と言われてきたその通りに、夢のように甘美なひとときに陶然と酔えば、舞台芸術としてはそれでもいいのかもしれない。

しかし、ただそれだけではないという気持が、観る方にも、またおそらくは演ずる方にもある。「あら、有り難や、嬉しやな」と宗盛のもとを去る、その熊野の喜びの裏に湧きあがる悲哀、恨みと呼ぶこともできそうなこの思いは、いったい何なのか。ただ単に名残惜しさでは済まされぬそのことを、「謡曲をよく読めば読むほど、何だかわかりにくくなる要素がこの物語にはある」と、三島由紀夫は言ったそうである。また、そうした感想に応えるようにして、能楽者の喜多六平太は、演じる者の心がけとして「そのあずまに、すきな男がいるので、それに逢いたいためためなのだ、その心持が大切だ」と伝書にあると、『六平太芸談』に書いている。

私がこうした事柄について考えるようになったのは、田代慶一郎

権力者の愛

— 熊野、そしてブルーストのことなど —

の『謡曲を読む』という本がきっかけだった。三島由紀夫のことばも、喜多六平太が語る伝書のこと、実を言えば田代氏の本で知ったことである。それまで『熊野』という能を知らないわけではなかったけれども、ほんとうに、華やかで少し悲しげな美女の風情を、年ごとに咲く桜をたいして深い心もなく美しいと感じるその程度にしか、関心は無かった。

『熊野』という作品に潜む不可解な部分、三島が「奇怪」とまで評したストーリーの内部構造を、田代氏は、主人公ふたりの愛情に由来するものだと思定している。『熊野』の文章の表面には、宗盛の側からも熊野の側からも、はっきりと情愛を示す表現はない。熊野はひたすら母の病を気づかい、宗盛は宗盛で、女の願いを無下に退けているとしか思われない。二人ながらに、ずいぶん自分勝手な恋人たちなのである。しかしそれにもかかわらず、この作品の背後には、男と女それぞれの、趣を異にした愛情が底流としてあって、それがいわく言いがたい陰影になっているのだと、田代氏は言う。

それは確かにそのとおりに違いあるまい。宗盛にしたところで、熊野を愛していなければ、引き止めるわけがない。熊野もまた、天

下人とも言うべき権力者の愛を受けて花の都に月日を送りながら、彼のもとを去ることに未練な思いが無いはずはないのである。しかし、ただそれだけのことであろうか。相互に去りがたい思いを残して、恋人たちが別れる。『熊野』という能があたえる一種不可思議な感動は、ただそれだけのことで説明がつくものであるか。仮に愛情ということを使うのなら、その胸中をもっと深くさぐって、それがどのような性質のものであったか、考えてみてもいいのではないか。そうすればその先に、例の伝書とやらが語る「あずまの男」のイメージと、権力者の悲痛な愛の地獄が見えてくるのではないか、そう思うのである。

『熊野』の底流として流れている愛のことを考えると、私はもう一つ別の、似たような愛の構図を持った文学を思い出さずにはいられない。それはマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』である。この大長編小説には、異性、同性さまざまな組み合わせの恋愛が幾つも描かれているが、そのなかで、シャルル・スワンとオデット、そして主人公「私」とアルベルチーヌの二つの恋は、相前後

権力者の愛

—熊野、そしてブルーストのことなど—

してほとんど作品全体を覆いつくす大きなものである。内容的にも、スワンの恋は「私」の恋によって一層の深まりを見せることになるので、この二つは、二つにして実は一つだと言うこともできないではない。その悲劇的な結末の果ての逆転として、「私」はようやくやくにして真の自己確立に到達するのだから、この恋愛こそは『失われた時を求めて』に描かれた最も大きな出来事、ブルースト文学の最大のテーマだと言ってもいい。

主人公「私」がこども時代から知っていたシャルル・スワンは、フランスの社交界の最高峰であるゲルマント一族のサークルの寵児だった。女道楽にかけても名うての猛者だったが、中年になって、ふとしたことから高級娼婦あがりのオデット・ド・クレシーとつきあうようになり、思いもかけない感情の深みに落ち込んでいく。そのきっかけは、完全に自分のものだと思いこんでいたオデットに、自分の知らない生活があることに気づいたこと、それによって激しい嫉妬の苦しみを覚えたことだった。その癒しがたい苦しみを癒す手段として、結局スワンはオデットとの身分違いの結婚を受け入れ、階級的にも下降していくことになるのだが、やがて過ぎし恋をふり

かえって、若い友人たる「私」に、こんなふうには語るところがある。

「神経質な人間にとっては、よく下々の者が言う「自分より下の相手」を愛するしかありません。利害問題で、好きな女を自分の思いどおりにできませんからね。(……)しかし、こうした種類の恋愛で危険なのは、女の示す服従がいつとき男の嫉妬を少しずつくればしても、嫉妬がますます激しくなるということ、ついには自分の愛人をちゃんと監視するために、昼も夜も明りをつけたままの囚人みたいに、生活させることになってしまうのです。そうになると、終わりはたいてい悲劇ですよ」

このスワンのことばは、「私」にとって予言的な意味を持つことになる。「私」の愛人となったアルベルチーヌは、正式の結婚相手としては身分的に不足な娘だったが、その彼女に「私」は、およそ思いつくかぎりの賛沢をさせて、行動と精神の自由を奪っていくのである。もともと同棲の決心をするにいたった動機が、彼女の側の同性愛の疑いだったから、その隠された秘密に怯えつつ刺激されて、

権力者の愛

—熊野、そしてブルーストのことなど—

「私」の監視はアルベルチーヌを「囚われの女」に変えてしまう。しかしその一方では、安心から「私」の嫉妬が薄らぐこともあって、そうなる執着そのものも弱まり、こんな女のために時間と心を使わせられるのはばかばかしいと、すぐにも離別を考える。そのあぐくの「私」の思いはこうだ。

アルベルチーヌとの生活は、片や私が嫉妬を感じていないときには、退屈でしかなかったし、他方嫉妬しているときには、苦痛でしかなかった。幸福なときがあつたとしても、それが持続することは不可能だつた。

そのような生活に耐えかねて、アルベルチーヌは自分から家を出てしまう。それはまさに、「私」が別れを本気で決意したその時だつたのだが、しかし、彼女の行動を知った「私」の苦悩は、それまでのあらゆる苦悩と比べようもないほど大きなものだった。一刻も早く彼女を引き戻すために、「私」はできるかぎりの手を打つ。しかも、ほんとうの本音、つまり彼女を愛していること、彼女なしに

は生きていけないことだけは、口が裂けても言いたくないと意地を張る。できることはただ、以前にもまさる派手な生活を約束することだけ。

空しい努力を続ける「私」のもとに、突然アルベルチーヌ事故死の知らせが届く。相前後して、「あなたのもとに戻るには、もう遅すぎるでしょうか？」という彼女自身の手紙。行き場のない欲望と絶望にうちのめされても、「私」の嫉妬は鎮まるすべもなく燃えさかる。自分の他にアルベルチーヌが愛したのであるう人間、求めたであろう快樂の事実を知ろうとして、人を使ってまで探索をつづけるのだが、しかしついに確証を得るには至らない。それも当然と言えば、彼女の話で、アルベルチーヌの同性愛、ことばを変えて言えば、彼女の「あずまの男」とは、「私」の嫉妬というイマジネーションが創造した幻に他ならなかつたからである。

身分的にあれ経済的にあれ（二つの条件は往々にして根は一つだが）、一方的に有利な立場にある権力者の愛は、表面的にいかにかに幸福であろうとも、内面的にはなんと孤独で悲劇的なものだろうか。相手が示す情愛も、欲得づくのものではないかという疑いを拭

権力者の愛

—熊野、そしてブルーストのことなど—

い去ることができない。その結果、自分自身の愛情を幾重にもひねったあげくの幻相手に、ドン・キホーテさながら孤独な嫉妬劇を演ずることにもなる。

孤独なのは権力者だけではない。愛されるほうもまた、支えとすべきものはあまりにも少ない。愛されるについての、客観的な根拠がない。よしんば今この時の愛情を信じるにしても、それがいつまでも持続するという保証はどこにもないのである。いっそ打算にもとづく関係であったならば、運良く続いているあいだのもうけものと、割り切ることもできるかもしれない。しかし、真実愛している場合、その自発的な愛情をどのようにして表現したらいいのだろうか。相手の意のままになっても欲得と見られる立場で、倦怠と猜疑のあいだを揺れ動いている男の心を常に感じながら、自分なりの愛の証しを立てるためには……、みずから決断して別れる以外に立つ瀬はないのではあるまいか。しかも、恋人が離れていこうとする時こそ、男の愛は燃えさかるものであることを知れば、なおのことである。熊野にせよ、アルベルチーヌにせよ、別れは必然的なものですらあった。

言うまでもなく、片や能の『熊野』、片やフランス小説の『失われた時を求めて』。その二つを一つの物語に見立てようというのではない。平宗盛にしても、またマルセル・ブルーストその人をおわせる「私」にしても、似ているのは物質的に優位にある恋人という状況だけで、これら二人の男性を具体的にイメージしてみれば、社会的立場といい気質といい、まことに個性的、同一視できるわけのものではない。

注目すべき事柄はおそらく、もう少し別なところにある。つまり、似たような状況を素材としていても、それが芸術作品となったときの表現様式がいかに違うかということ、この二つの例から見ることができないのではないかと思うのだ。

フランス心理小説の伝統の上に立つブルーストは、愛の地獄を精根のかぎり説明しようとする。その結果「真実も人生も、実にこみいっている。結局のところ、私はそれらを知ることができず、ある印象が残されただけだったが、そこではおそろく悲しみよりは疲労のほうがまさっていた」と、そう嘆かざるをえない極限まで。

それに対して『熊野』では、裏に無いはずのない情愛もその葛藤

権力者の愛

—熊野、そしてブルーストのことなど—

も、ことばの表層には現れない。それを言ってしまったのは、文字どおり、みもふたもなくなってしまうのである。肝心なことはことばには言わず、母の病気にかこつけて、あるいは村雨に寄せて、つまりは中身に蓋をして、そこはかとなく漏れいでる「奇怪な」風情に、かすかに心騒がせる、それが日本の芸術に固有の表現様式なのである。言わないでも、わかる人にはわかるはずだと流すところが、日本の美意識の奥ゆかしさでもあれば、度し難さでもある。

それにしても、別れることによってしか存在を示すことのできない人の愛とは、なんと悲しいものだろう。そのことを、咲くそばから散るからこそ桜の花はあのようにも美しい、それと同じことだと、そう言ってしまった方がいいのかどうか、私にはわからない。

(初出「図書」一九九二年七月号)